

二人の受け手はどのように質問に応えるか — 接触場面と母語場面の三者自由会話の分析 —

How two receivers respond to a question: An analysis of the conversation among three acquaintances in Japanese contact and internal situations

大場美和子（広島女学院大学）

OHBA Miwako (Hiroshima Jogakuin University)

Abstract

This research aims to find out the different participating processes in two types of group situations, namely internal situations which involve three native speakers (NS) of Japanese, and contact situations which involve two NS's and one non-native speaker (NNS) of Japanese. The focus of the discussion is placed on the process of how two receivers respond to a topic opening question and how they accomplish three-party conversation. The data comprises of 22 free-talking sessions among three acquaintances. 14 sessions were conversations in contact situations (low intermediate level 7, high intermediate level 7) while 8 were Japanese internal situations. In the internal situations, most responses were done by only one receiver and the topic was developed to related contents. As they were free-talking sessions, imbalanced presenting information and utterances were acceptable and they enjoyed their conversation. In contrast, topic opening question in the contact situations were mostly done by NNS, and they became like two-party conversations between NS and NNS despite the fact that there were actually three participants. Also, in the low level NNS case, it is assumed that NS's were highly conscious of the existence of NNS because NNS could not show their understandings linguistically and the NS's became participate more. In the high level NNS case, however, interaction was not only observed between NSs and NS, but also NS and NS and there were like features of both internal and low-level NNS situations. Both distributing information and utterances were imbalanced in the all situations, but how they were imbalanced was different according to the internal and contact situations, and language ability of the NNS.

1. 研究の目的

本研究の目的は、接触場面と母語場面における三者会話を分析対象とし、話者が 2 人の受け手に向けて質問をすることによって話題を開始した場合、2 人の受け手はどのように応えながら、三者会話であることを達成していくのかを明らかにすることである。多人数会話では、二者会話のように一対一の相互作用とは異なり、誰が次話者になるのかという役割交替の問題が生じる。さらに、3 人のうち 1 人が非母語話者の場合、参加者間に言語能力の差が生じ、話題の理解や発話の困難さという、会話参加の前提に関わる言語能力の問題が生じる。つまり、接触場面における三者会話とは、参加人数による相互行為の複雑性に、言語能力の問題が加わり、参加者間に不均衡な役割配分（村岡 2003）が発生するといえる。このような条件の会話において、2 人の受け手に向けて質問によって話題が開始された場合、2 人の受け手のどちらがどのよ

うに伝えていくのかという、二者間の会話にはないやりとりが観察される。そこで、本研究では、2人の受け手に向けた質問によって開始された話題に焦点をあて、接触場面と母語場面、接触場面では非母語話者の言語能力の違いに注目して分析する。

2. 先行研究

2.1 接触場面の分析の重要性

日本語学習者は、日本語を用いた様々な場面の活動に参加していくと考えられる。ネウストプニー (1981, 1995) は、学習者が実際に参加する接触場面は母語場面とは実質的に異なるものであり、接触場面における実態を明らかにすることにより、接触場面を基盤とした日本語教育を行う重要性を主張している。よって、この接触場面の研究では、母語話者からの視点だけで分析するのではなく、母語話者(NS)と非母語話者(NNS)の各参加者の規範に基づく言語管理プロセスを探る必要があり、ネウストプニー (1994) は、この参加者の活動参加時における意識を探る方法の1つとして、フォローアップ・インタビューの有効性を主張している。

2.2 話題に対する参加者の情報量の違い

Goodwin (1981) は、会話の受け手を、参加者の話題に対する情報保有の観点から、「知っている受け手 (knowing recipient)」と「知らない受け手 (unknowing recipient)」に分類している。そして、話し手は、受け手の知識の状態を考慮しながら会話を展開しているとしている。三者会話には受け手が2人おり、この2人が現行の話題に対し同等の情報を保有している場合、2人の受け手の両者ともに質問に答えうる。よって、どちらがどのように答えるのかという調整が参加者間で行われると考えられる。また、その調整は、母語場面と接触場面、さらに接触場面ではNNSの言語能力によって異なると予測される。

2.3 多人数会話における相互行為

二者会話では、通常、現行の非話者が次話者になるが、多人数会話では複数の次話者候補が存在し、参加者間の相互作用が多様になることが指摘されており (cf. Kerbrai-Orecchioni 2004)、日本語の会話分析でも、高梨他 (2004)、榎本 (2004) などがこの問題を論じている。また、多人数会話における特徴的なやりとり関する具体的な分析には、Kawasaki(1992)、初鹿野・岩田 (2007)、熊谷・木谷 (2005)、中井 (2006) などがある。Kawasaki (1992) は、三者会話の分析から、参加者Aが本当の意図としては参加者Bに向けた発話を、もう1人の参加者Cに向けた形で発話し、それに対して本来の受け手であるBがAに応答する「ブーメラン・スピーチ (Boomerang speech)」について分析している。初鹿野・岩田 (2007:340-341) は、「ある特定の話者が、聞き手の知らないもう一人の参加者についての情報を提示するという行為」に注目し、三者会話での情報の不均衡を解消し、全員の参加を可能にしているとしている。熊谷・木谷 (2006) は、調査者1名、非調査者2名による面接調査場面の分析から、「回答者間の相互作用」を指摘している。これは「複数の回答者がその場にいることによって可能になっている相互作用」であるとし、相互作用の種類として、同意要求・情報確認とそれへの応答、もう一人の回答へのコメントとそれに対する応答・反応、互いの発話をふまえた回答、もう一人の回答への相づち・反応が観察されたことを報告している。中井 (2006) は接触場面の4者会話にみられる、参加者がチームに分かれて情報交換を行っている様相を指摘している。

以上をふまえ、本研究では、接触場面と母語場面における三者会話を分析対象とし、話題に対する情報保有者である 2 人の受け手が、情報を持たない話題開始者の質問に対し、どのようなやりとりによって応えていくのかを明らかにする。

3. データ

分析対象は、知人関係 3 人（女性）による 20 分程度の雑談である。接触場面（NNS, NS1, NS2）14 組、母語場面（NS1, NS2, NS3）8 組の会話（計 22 会話）を録画・録音により収集（2004 年 2 月～2006 年 1 月）した。また、後日、参加者全員に対して個別にフォローアップ・インタビュー（以下, FUI）を行った。NS と NNS の参加者は全て関東圏の大学に所属する学生である。3 人の参加者は授業やサークルなどで知り合っており、会話時は既に顔見知りである。

接触場面における NNS については、学習歴、滞日歴、母語などには統制を加えず、調査時点で言語能力が中級レベルであることを条件とした。中級レベルの学習者は、日本語教育の現場では多数存在し、中級という枠組み自体にも幅がある。よって、中級レベルの前半と後半に分け、それぞれ 7 組ずつ、計 14 組の会話を収集した。表 1, 2 に NNS の属性を示す。以下、接触場面の会話データは、中級前半レベルの NNS が参加する場合は「前半 NNS1～7」、中級後半レベルの NNS が参加する場合は「後半 NNS1～7」、母語場面の会話データは「母語場面 1～8」と表す。

表 1: 前半 NNS (中級前半レベルの NNS 1 名と NS 2 名) の会話データ

会話データ	国籍	母語	年齢
前半 NNS 1	タイ	タイ語	20 代前半
前半 NNS 2	中国	中国語	20 代後半
前半 NNS 3	デンマーク	デンマーク語	30 代前半
前半 NNS 4	カナダ	英語 (best), 中国語 (first)	10 代後半
前半 NNS 5	ドイツ	ドイツ語	20 代後半
前半 NNS 6	ブラジル	ポルトガル語	30 代前半
前半 NNS 7	アメリカ	中国語	10 代前半

表 2: 後半 NNS (中級後半レベルの NNS 1 名と NS 2 名) の会話データ

会話データ	国籍	母語	年齢
後半 NNS 1	モンゴル	モンゴル語	20 代前半
後半 NNS 2	インドネシア	インドネシア語	20 代前半
後半 NNS 3	中国	中国語	20 代後半
後半 NNS 4	韓国	韓国語	30 代前半
後半 NNS 5	タイ	タイ語	20 代前半
後半 NNS 6	ロシア	ロシア語	10 代後半
後半 NNS 7	ベトナム	ベトナム語	20 代後半

4. 分析

2 人の受け手に対する質問によって開始された話題の抽出方法について述べる。大場 (2007) では、母語場面と接触場面の全 22 会話を話題ごとに区分し¹、各話題を開始した発話を、「発話の方向」と「発話の種類」とで分類し、接触場面と母語場面の話題の開始のしかたの違いを

分析した。まず、「発話の方向」とは、話題を開始する発話が、1人の受け手だけに向けたのか（例(1)）、2人の受け手の両者に向けたのか（例(2)）によって分類した（一方向と二方向）。例(1)では「NS2 ちゃん」と名前によって明示的に1人の受け手を限定している。しかし、例(2)では受け手を1人に限定はしておらず、また、FUIにおいて、発話者は話題につきり、2人に対してとりあえず天気について聞いてみたことを報告している。次に、「発話の種類」とは、話題を開始する発話が、情報提供（例(3)）か情報要求（例(1)(2)）かによって分類した²。以上から、(2)のような例が2人の受け手に向けた質問によって開始された話題であることを認定した。

例(1) 話題 24 【NNS→NS2】 NS2 ちゃんはどう↑ （後半 NNS2）

例(2) 話題 24 【NS2→NNS& NS1】 んー今日はちょっと寒いですか↑ （後半 NNS 7）

例(3) 話題 7 あ、あれいったよハーバーシティ（母語場面 1）

（大場 2007:43）

次に、表 3 は、二方向の情報要求の開始の話題における、3人の参加者の情報保有の有無をまとめた結果である。Goodwin（1981）の「知っている受け手／知らない受け手」を参考に、参加者を「知っている者」と「知らない者」に分けた。この参加者の知識状態については、会話の内容と FUI から判断した。「知っている者」が「○」、「知らない者」が「×」であり、3つの連続した「○」と「×」は「話題の開始者、受け手 1、受け手 2」の順番となっている。つまり、「○○○」であれば3人の参加者（話題の開始者、受け手 1、受け手 2）の全てが「知っている者」、「×○○」であれば話題の開始者は「知らない者」であるが、2人の受け手は「知っている者」となる。なお、同じ「知っている者」であっても、その保有する情報量が均等であるとは限らない。

表 3: 接触場面と母語場面における参加者の情報量の違い

情報量の有無	母語場面	前半 NNS	後半 NNS
○○○	12	3	4
○××	6	0	2
○○×	3	2	1
小計	21(55%)	5(21%)	7(30%)
×××	5	2	2
×○○	11	14	12
××○	1	3	2
小計	17(45%)	19(79%)	16(70%)
合計	38	24	23

本研究では、この「×○○」に注目し、「知らない者」が二方向に向けた情報要求に対し、2人の「知っている者」の受け手がどのように調整を行いながら情報提供を行って話題を展開させたのかを分析する。「×○○」に注目したのは、例えば「××○」では、通常、次話者が情報保有者に限定されるのに対し、「×○○」では2人の受け手のどちらもが応えうるためである。対象となるのは、表 3 から、母語場面 11 例、前半 NNS 14 例、後半 NNS 12 例である。

まず、話題開始の情報要求に対する第二応答発話を2人の受け手はどうしたのか、次に、その後の話題の展開はどうなったかを分析する。例(4)では3人の後期の体育の授業について話し

ている。3人は前期の体育では同じ体育の授業を受講している。まず、NS1が「え後期なにやった↑」とNS2とNS3の2人に向けて情報要求を行う(120)。これに対し、NS2が「後期バレーボールだった」(121)、NS3が「トランポリン」(123)と答え、2人の受け手が、話し手の情報要求に対し、第二応答発話において情報提供をしている³。また、話題の開始者であるNS1自身も「バドミントン」と情報提供をしている(125)。これに対し、NS3が「バドミントンか、外↑中↑」(126)、とNS1に情報要求を行い、その後はNS1に関する情報が展開する。つまり、質問の直接的応えとなる第二応答発話は2人の受け手が行うことで3人であることの調整がなされているが、第二応答発話以後の展開では、第二応答発話に関連した情報要求により、1人が情報提供を行っている。この結果、NS1とNS3のやりとりとなり、NS2は傍参与者となっている（大場 2006）。

例(4) 後期の体育(母語場面 3)

	NS1	NS2	NS3
120	え後期なにやった↑		
121		後期バレーボールだった	
122	ん		
123			トランポリン
124		あー↑	
125	バドミントン		
126			バドミントンか、外↑中↑
127	なかなかなか		
128			中
129		ん	
130			バドミントンいいよね
131		[うん]	[楽そう]
132	楽しかったすーごい		
133	楽しかったしかもテニスより		
134	かーんたん		
135		あー	
...			

(以下略)

以下、例(4)のように、話題開始の質問に対する2人の受け手の第二応答発話、さらに第二応答発話後の話題の展開について、4.1で母語場面、4.2で前半NNS、4.3で後半NNSの会話例とともに述べる。

4.1 母語場面における2人の受け手に向けた情報要求

表4は、母語場面における話題開始の質問に対する2人の受け手の第二応答発話とその後の話題の展開についてまとめた結果である。情報提供者に注目すると、全11例中、第二発話では受け手の1人が応える場合が6例、2人とも応える場合が5例である。その後の展開においては、1人のみの情報提供が6例、2人以上が5例となっており、必ずしも情報提供の配分が均等ではないことがわかる。

第二発話以後の展開の方法としては、1) 第二応答発話に関連した情報提供（例(4)）が6例と半数を占め、2) 自発的な情報提供が3例、3) 話題開始の質問と同様の情報要求による情

報提供が2例である。以下、2)と3)の例を挙げて述べる。

表4: 母語場面における第二応答発話とその後の展開

No.	会話	話題番号と話題	開始者	第二	第二応答発話後の展開
				提供者	提供者 展開の方法
1	母1	1 指導教官	NS3	2人	1人 関連した情報要求による情報提供
2	母1	18 スクランブル	NS3	1人	1人 自発的情報提供
3	母3	21 歯磨きの時間	NS3	1人	3人 関連した情報要求による情報提供
4	母4	4 後期の体育	NS1	2人	1人 関連した情報要求による情報提供
5	母4	19 観察実習	NS1	2人	2人 関連した情報要求による情報提供
6	母7	9 大祭のHG	NS1	1人	1人 関連した情報要求による情報提供
7	母7	15 部活の流行	NS1	2人	1人 自発的情報提供
8	母8	5 就職活動	NS2	1人	2人 同様の情報要求による情報提供
9	母8	11 空手部入部	NS2	2人	2人 同様の情報要求による情報提供
10	母8	15 普段の練習	NS2	1人	2人 関連した情報要求による情報提供
11	母8	17 人数男女差	NS2	1人	1人 自発的情報提供

まず、2人の受け手が第二応答発話後に自発的に情報提供を行う例について述べる。例(5)は、スクランブル交差点とはどういうものかというNS3の情報要求(447)によって話題が開始され、NS2だけがNS3の情報要求の意図を聞き返し(448-450)、455以降、スクランブル交差点について説明をし、もう1人の受け手NS1は傍参与者となる(大場2006)。FUIから、NS1もスクランブル交差点についての情報は持っていたことがわかった。また、455でNS2と同時に「こう」と発話し、両腕でスクランブルの形式を表しているが、NS2の説明に笑いやあいづち的発話をするにとどまっている(456, 460, 468)。つまり、NS2はNS3の質問に対し、自ら説明をするかたちで1人で情報提供を行っており、ここでの情報と役割の配分はNS2のみが担っている。自由会話の場合、「知っている者」であっても必ずしも情報提供を行う必然性はなく、また、あいづち的な発話により傍参与者として参加すること(大場2006)が許容されるためであると考えられる。

例(5) スクランブル(母語場面1)

	NS1	NS2	NS3
447			スクランブルの定義ってなに↑
448		てかごめんスクランブルの	
449		定義ってなにっていう質問が	
450		意味わかんなかった	
451			え、え、スクランブル交差点、
452		/うん/	ってさ/何↑
453		うわーやべーそこからか	
454		{笑}	
455	[こう]	こ、[こう]いうやつ	
456	{笑}		
457			あー
458		歩行者が一斉にこう	
459		いけるやつー	
460	うんうん		
461			あー一斉に信号が止まる
462			っていうやつ↑
463		そうそうあのほらパルコの	
464		あそこの、あるじゃん信号の	

465			あー
466		はいはいはいはい	
467			あそこ↑
468	/[笑]/	あれスクランブル交差点/	
469		[っていう]	[なるほどー]
470		んー	
...			

(以下略)

例(6)は、話題開始の質問と同様の情報要求によって、2 人の受け手の両者が情報提供を行う例である。参加者は全員学部 3 年生で、進路について関心を持っている。NS2 が「え就職するの就職する↑」と 2 人に今後の進路について質問する（101）と、まず NS3 が「わからない就職かなー」（102）と応え、続けてニートでもいいと冗談を述べる（103-106）。この NS3 の冗談で 3 人が笑った（107-109）後に、話題開始者の NS2 は、NS1 に身体の向きを変えて「え就活↑就活↑」と同じ内容の質問を行う。もう 1 人の受け手を意識した調整が行われたと考えられる。FUI において、各参加者は、NS1 と NS3 は同じ高校出身で同じサークルに所属しているため、NS2 との間に親疎関係の違いがあったことを報告した。2 人について情報が不足している NS2 は、2 人に同じ情報要求を行ったと考えられる。表 3 では他に 2 例同じように情報要求を行う例があるが、全てこの母語場面 8 の例である。例(4)(5)と表 3 から、自由会話では、情報提供と役割の配分は、3 人の参加者間で均等ではないことが許容されることについて述べた。しかし、母語場面 8 のように、同じ知人関係であっても親疎関係の差によって情報量に違いがあることを参加者が留意した場合は、2 人の受け手を意識した調整が行われるといえる。

例(6) 就職活動(母語場面 8)

	NS1	NS2	NS3
101	[うん]	うん[え]就職するの就職する↑	
102			わかんない就職かなー
103			なんか上ー上とか行くとか
104		[あー院]	[考えてないからー]
105		[んー]	うん全然考えてない[からー]
106			えいいよニートでも、とか
107	[[笑]]	[[笑]]	[[笑]]
108	[すごーい]	[[笑]]	[[笑]]
109	[[笑]]	今私も思った	[[笑]]
110		え就活↑就活↑	
111	一応するーと、思う		
112	[[笑]]	[[と思う]]	
113		そっかー	
114		[へー]	[へー]
115		大変な時期だね	
116	うん		

4.2 接触場面(前半 NNS)における 2 人の受け手に向けた情報要求

表 5 は、接触場面（前半 NNS）における話題開始の質問に対する 2 人の受け手の第二応答発話とその後の話題の展開についてまとめた結果である。まず、14 話題中 12 話題が NNS によって開始されていることが指摘できる。つまり、NNS が「知らない者」として、「知っている者」

である NS に情報要求を行うことによって、話題が開始されていたといえる。情報量の違いと、NS と NNS の対立が重なり、三者会話でありながら二者会話のようなやりとりとなっている。

次に、情報提供者に注目すると、第二応答発話が 1 人の情報提供の例が 8 例、2 人が 6 例である。その後の展開においては、1 人のみが 3 例であるのに対し、2 人以上が 9 例である。NNS の質問によって開始された話題に対し、2 人の NS が積極的に情報提供を行ったと考えられる。

展開の方法としては、1) 自発的な情報提供が 8 例と多く、2) 相談による情報提供が 3 例である。1) の場合、自発的な情報提供に加え、母語場面で述べた、「関連した情報要求による情報提供」が加えられる例もある。なお、No.7 と No.11 の例は話題開始の質問後すぐに終了した例である。以下、例を挙げて述べる。

表 5: 前半 NNS における第二応答発話とその後の展開

No.	会話	話題番号と話題	開始者	第二	第二応答発話後の展開	
				提供者	提供者	展開の方法
1	前 1	10 スペイン語学習	NNS	1 人	2 人	自発的信息提供
2	前 1	13 外国語学習	NNS	1 人	2 人	自発的信息提供
3	前 1	14 将来の夢	NNS	1 人	2 人	+ 関連した情報要求による情報提供
4	前 1	21 タイ語	NS2	2 人	3 人	自発的信息提供
5	前 1	36 高校生バイト	NNS	1 人	2 人	+ 関連した情報要求による情報提供
6	前 2	2 会話のスタイル	NNS	2 人	なし	自発的信息提供
7	前 2	19 最近の忙しさ	NNS	2 人	1 人	なし
8	前 3	23 カレー屋の場所	NNS	1 人	2 人	関連した情報要求による情報提供
9	前 3	25 ゴマをする	NNS	2 人	2 人	相談による情報提供
10	前 4	5 スパゲッティ	NNS	1 人	3 人	相談による情報提供
11	前 4	14 みかん	NS2	2 人	なし	相談による情報提供
12	前 5	7 ぎゅうとぶた	NNS	2 人	2 人	+ 関連した情報要求による情報提供
13	前 6	4 エキゾチック	NNS	1 人	1 人	なし
14	前 7	2 NS1 の授業	NNS	1 人	1 人	自発的信息提供

例(7)は自発的な情報提供の例である。まず、NNS が日本の高校生はバイトをよくするのかという質問で話題を開始する (947-948)。これに対し NS2 が実は NS1 と NS2 は同じ高校出身であるという直接的には関係のない情報を提示するが (951-952)、続けて最初の NNS の情報要求に対して答えている (955-961)。955 で「だけどーあんまりーね↑」と NS1 に同意を求めるが、そのまま説明を続ける。次に、NS1 が 971-981 で長期休暇中はバイトをする人があるということ、982-992 で再び NS2 が冬休みは郵便局の年賀状バイトがあることなど、次々に自発的に情報提供を行っている。NNS の情報要求に対し、2 人の NS が「知っている者」として積極的に情報提供を行っていると考えられる。

例(7) 高校生バイト (前半 NNS 1)

	NS1	NNS	NS2
947		だいたい日本人は高校生は	
948		バイト、し、している↑	
949			高校生↑
950		うん	

951			あたしーの学校さ
952			同じだったのー
953		うん	
954	うん		
955			だけどーあんまりーね ↑
956			あんまりーなんか、
957			やってもいいよーっていう
958			感じではなかったの
959	うん		
960		うーん ↑	
961			勉強頑張りなさいっていう
962		うーん	
963			うん
964		高校生ーは、同じーの ↑	
965	[うん]同じ高校		[うん]
966		ふーん ↑	
967	学年は1つ、違うの		
968		[ふーん ↑]	[うん]
969	そうそう		
970			うんうんうん
971	一応禁止 ↑ だったの		
972	バイ、バイ、アルバイト		
973	禁止だったの		
974		うん	
975	で休みのー長いお休みの		
976	時だけー/なんか許可し、	/うーん/	
977	許可もらってーできたー		
978		うーん ↑	
979	あ、ほん、[あんまりー]		[咳]
980	している人いなかった		
981	[かな ↑]	[うーん]	
982	/うん/		うーんまでも冬とか夏とかー/
983			あー冬はけっこう郵便局で、
984			バイトしてた
985		うーん ↑	
986			郵便局でー
987		[うん]	日本って年賀状っ[ての]
988		/うん/	出すからー/
989			それをーみんなーこうやって
990		[うんうん]	分けてー分ける作業[がね]
991			大変だからー
992			学生に[やらせるんだよ]
993		あー	
994			[笑]

次に、2人の受け手が相談しながら情報提供する例について述べる。例(8)は、最近近所に来てきたカレーの専門店の場所をNNSが情報要求することによって話題が開始している(883)。まず、NS1が「早稲田通りのー」第二発話を行う(884)が、途中でNS2に「あれどこだろうね↑」(885)、さらに、「なんかクイックリーとか、の近くだよね↑」(887-888)とNS2に対して情報の確認を行い、NS2が応えながら説明を始める。FUIにおいて、2人のNSは、カレー屋の場所はわかるものの、その説明が難しかったことを報告している。2人で相談(cf. 熊谷・木谷 2006)しながら情報提供を行うためNS同士のやり取りとなり、NNSは傍参与者となる(大

場 2006) . しかし, 2 人の相談による情報提供は, NNS の最初の情報要求に応える形で収束する. NS 同士で実質的なやりとりがなされていても, NNS に情報提供を行っているという意識であると考えられる. また, 2 人で相談しながら情報提供を行うことにより, NS の負担が軽減されつつも, NNS の情報要求には応えるという目的は達成されている.

例(8) カレー屋の場所(接触場面 3)

	NNS	NS1	NS2
883	どこどこ↑		
884		早稲田通りのー	
885		あれどこだろうね↑	
886			スパイシースプーン
887		なんかクイックリーとか、	
888		の近くだよ↑	
889			早稲田通り通らないからー
890		[あんまりー]	[馬場駅]の近く
891	んー		
892			馬場駅と、明治通りの
893			真ん中ぐらい
894			明治通り
895	行ったことない		
896			行ったことない
897	[[笑]]	[最近]	
898	[[笑]]	[ほんとに最近できたよね↑]	
899			どっちも↑うん、そうそう

(以下略)

次に自発的な情報提供による情報の詳細化とそれに関連した情報要求による情報提供の例である. 例(9)では, まず NS2 が「タイ語ってどんな、感じなんだ」とタイ語について 2 人に質問する (571) . タイ語については母語話者である NNS が一番情報を持っているが, タイ語を勉強したことのある NS1 がまずタイ文字は丸いと応え (572-573) , NNS はその発話を繰り返している (573-574) . その後の展開においては, NS1 の情報要求 (586-589, 611-615, 623) によって NNS がタイ語の男女の違いに関する情報提供 (590-602, 614-624) を行う. ただし, 情報の内容は NS1 の発話の繰り返しに近く, NNS によって情報が詳細化されているというわけではない. また, 質問者の NS1 がその情報提供に対しコメントを述べる (604-609, 629-636) と, NNS はあいづち的発話をしている (608, 631, 635, 637, 638) . つまり, NNS が話題開始の質問に対して一番応えうる存在でありながら, 実質的には, 2 人の NS が実質的内容を発話しているといえる. 具体的には, 1 人の NS が「知っている者」として確認をすることによって情報提供を行い, もう 1 人の NS が「知らない者」としてコメントを述べることによって情報提供を行っている. NNS の言語能力を留意した 2 人の NS が, 母語話者として調整を行い, 結果として NS の過剰参加となっていると考えられる.

例(9) タイ語(接触場面 1)

	NS1	NNS	NS2
571			タイ語ってどんな、感じなんだ
572	タイーなんかこんな丸		

573	[とか]	[うん丸]、	[ふーん]
574		[タイ文字は]丸ー	あそうなんだ
575			
576		がある	
577			タイ文字はわかんない
578		[[笑]]	[どんなんだか]
579			見たこともないかも
580		ふーん	
581			うんうんうん
582	読めないけどー/	/[[笑]]/	
583	{見たことはあるー}		
584			ふーん ↑
585	うん		
586	あと一女の人とー		
587	男の人でー語尾にち		
588	なんかサワディカっ[とー]	[うん]	
589	カップがあるよねー		
590		はい、男ーの人ーはー	
591		kap、kap あーのー	
592		女の人ーはーkaー	
593	うん		
594		うん	
595		あーのーでもっと丁寧ー	
596		例えば sawatdii だけは一	
597		うーんあんまり丁寧じゃなーい	
598		うーん sawatdii kha	
599		うんもっと丁寧	
600	ふ[ーん ↑]		[ふー]ーん ↑
601		先生にーいう時ー	
602		sawatdii kha んー	
603			ふーーん ↑
604			やっぱりー名詞とかで
605			男性と女性って
606			分かれてない言語って
607			ほんとに数少ないんだね
608		[うんうん]	[そういう]ほう多いんだね
609			やっぱり
610			ふーん
611	タイ語はーあの名詞とかー		
612	形容詞とかーも全部、		
613	違う ↑ 男性と女性で		
614	[同じ]	うーん、お同じ[同じ]	
615	ん ↑ 語尾だけ違う		
616	[ふーん]	うん、[最後だけー]	
617		kha、khrap だけ、うん	
618			あーーふーん ↑
619		あでもーわた私ーは	
620		タイ語は男の人は一	
621	/[うん]/	phom ぼ僕です/ぼ、僕ー	/[うん]/
622		あーの女の人は一 dichan	
623	リシャーン/っていうの ↑	/うーん/	
624		うーん	
625			ふーん ↑
626		dichan	

627			うーん
628	日本も同じだよ		
629		[うーん]	[[同じだね]]っていうか
630	[私]と僕みたいなね ↑		[あれ]
631		[うーん]	[でも]私と僕以外にもすごく
632			いっぱいあって一混乱しない ↑
633			わしーとか{さー俺とか}
634			ねー ↑
635		うーん	
636			俺とかーあたしーとか{さー}
637		[[笑]]	[[笑]]
638		うーん	
639	1 つじゃないんだよね		
640		[[笑]]	[ねー] ↑
641	[[笑]]		[んー]

4.3 接触場面(後半 NNS)における 2 人の受け手に向けた情報要求

表 6 は、接触場面(後半 NNS)における話題開始の質問に対する 2 人の受け手の第二応答発話とその後の話題の展開についてまとめた結果である。まず、12 話題中 9 話題が NNS によって開始されており、前半 NNS と同様に、NNS が「知らない者」として、「知っている者」である NS に情報要求を行うことによって、話題が開始されていたといえる。

次に、情報提供者に注目すると、第二応答発話が 1 人の例が 5 例、2 人が 7 例である。第二応答発話後の展開においては、1 人のみが 5 例であるのに対し、2 人以上が 7 例である。

さらに、展開の方法としては、自発的な情報提供、関連した情報提供と情報要求による情報提供、相談による情報提供があり、多様な方法で話題を展開していることがわかる。話題開始の質問に答えるだけではなく、質問に関連した様々な情報を提供しあっていると考えられる。以下、例を挙げて述べる。

表 6: 後半 NNS における第二応答発話とその後の展開

No.	会話	話題番号と話題	開始者	第二	第二応答発話後の展開	
				提供者	提供者	展開の方法
1	後 1	1 NNS の欧州旅行	NS2	2 人	1 人	関連した情報要求による情報提供
2	後 1	18 日本の大学院	NNS	2 人	2 人	自発的な情報提供
3	後 2	18 日本の宗教心	NNS	1 人	2 人	自発的な情報提供
4	後 4	16 イケメンの意味	NNS	2 人	1 人	自発的な情報提供
5	後 6	2 NS2 の犬	NNS	2 人	1 人	関連した情報要求による情報提供
6	後 6	5 旅行のお勧め	NNS	1 人	3 人	関連した情報提供と情報要求による情報提供
7	後 6	6 NS の出身地	NNS	2 人	2 人	関連した情報提供と情報要求による情報提供
8	後 6	11 NS1 のバイト	NNS	1 人	1 人	関連した情報提供と情報要求による情報提供
9	後 6	13 日本の大学	NNS	2 人	2 人	相談による情報提供
10	後 6	18 NS2 の趣味	NNS	2 人	1 人	関連した情報提供と情報要求による情報提供
11	後 7	8 ジャイカの職員	NS1	1 人	2 人	自発的な情報提供
12	後 7	24 今日の天気	NS2	1 人	2 人	関連した情報提供と情報要求による情報提供

例(10)は、関連した情報提供と情報要求による情報提供の例である。まず、NNS が 2 人の NS のバイトについて質問する(339)。これに対し NS1 が「うんえーとうん家庭教師みたいな感じかな」と答える(340-341)。この情報に対し、NNS がバイトの内容について情報要求を次々と行い(345, 348, 351)、NS1 と NNS の二者間のやりとりとなる(大場 2006)。一方、NS2 も

NS1 に対し数学を教えることに関して情報提供と情報要求を行い (355-356, 359, 361) , 今度は NS 同士のやりとりとなる (大場 2006) . ただし, NNS の話題開始の質問に応える形で収束しているわけではない点で, 前半 NNS とは異なる. つまり, NNS の情報要求に応えつつも, NS 同士でも会話を楽しんでいると考えられる. 後半 NNS は実質的発話により NS の情報要求に対して理解の承認を提示する (345, 348, 350-351) ので, NS は前半 NNS に観察されたような過剰参加とはならないと考えられる. しかし, NS1 は「でも英語一の教育ってやっぱロシアと日本って違うのかな」と NNS に対して情報要求を行うことで, 新しい話題を開始する (365-367) . NS 同士のやりとりが続いても, やはり NNS という 3 人目の参加者を, 2 人の NS は意識していると考えられる.

例(10) NS1 のバイト(後半 NNS6)

	NS1	NS2	NNS
339			あのなんかバイトしてる↑
340	うんえーとうん家庭教師		
341	みたいな感じかな		
342			あ
343		あー家庭教師	
344	うんうん		
345			日本語↑
346	日本語日本語あでも英語		
347	とかもあるかな		
348			あー英語と日本語教えてる↑
349	そう、え日本語、数学だね数学		
350			数学あー
351	数学[数学]		[[数学]]、上手ー↑
352	いやーでも中学生とかだから		
353	[そんな]		[[あー]]
354	うんうんうん		
355		えーでも数学とかできそうな	
356		イメージ	
357	いやいや全ぜーん		
358	[小学生]レベルだから全ぜーん	[[笑]]	
359		できますー↑	
360	大丈夫だと思います		
361		あー私全然もう忘れてますー	
362	[[笑]]	[[笑]]	
363	XXXX		
364	そっかま数学、		
365	でも英語一の教育って		
366	やっぱロシアと日本って		
367	違うのかな		

例(11)では, NNS が 2 人の NS の趣味について情報要求することで話題を開始している (577) . これに対し, NS1 は「趣味なーんだろー」と自問自答するような発話を行い (578) , 「あります↑」と NS2 に対し NNS と同じ情報要求を行っている (579) . これに対し, NS2 が「えー喫茶店めぐり↑」と答え (580) , 以下, その趣味について説明を始める. これは, Kawasaki(1992) の「ブーメラン・スピーチ (Boomerang speech)」に相当し, 二者会話では観察されない現象である. FUI において NS1 は, 読書などいわゆる趣味らしいものがとっさに思い浮かばず, NS2

にふって見たことを報告した。一方、NS2 は、この話題に限らず、NNS の情報要求による話題転換の唐突さを留意しており、それまであまり話せなかったものの、この趣味についての話題では、ようやく自分のペースで話すことができたと報告した。ブーメラン・スピーチにより、2 人の NS が各自で留意していた問題が解決し、肯定的評価につながったと考えられる。

例(11) NS2 趣味(接触場面 6)

	NS1	NS2	NNS
577			なんか趣味、あるー↑
578	趣味なーんだろー		
579	あります↑		
580		えー喫茶店めぐり↑	
581	あー[楽しいねー]	[[笑]]	[巡り↑]巡りっていうのは↑
582		喫茶店	
583	[ツアーみたいなの]	[色んな喫茶店行くのー]	
584			あー喫茶店めぐり
585		そうそうそう	
586		新しいお店を発見したりとかー	
587			あー
588		それがー好きかなー	

(以下略)

5. 考察

接触場面と母語画面において、「知らない者」である話し手が、2 人の「知っている者」に対して情報要求を行うことにより開始された話題に注目し、情報要求に対する第二応答発話とその後の展開が、3 人の参加者によってどのように行われているかを分析した。以下、各場面の特徴についてまとめる。

まず、母語場面では、第二応答発話でもその後の展開においても、情報提供を行うのは 1 人の場合と複数の場合とがほぼ半数の割合であり、情報提供と役割交替の配分が不均衡であっても許容される点が指摘できる。特に話題の展開においては、第二応答発話に関連した情報要求による情報提供（例(4)）が多く、参加者が関心を持った内容について話題が展開しているといえる。熊谷・木谷（2006）の面接調査場面とは異なり、自由会話の場合は必ずしも最初の情報要求に応じて収束しなくてもよく、その場の参加者の話題に対する志向によって話題が展開していると考えられる。

次に、前半 NNS の特徴としては、NNS の情報要求によって話題が開始され、2 人の NS による自発的な情報提供や相談による情報提供が行われ、NNS の質問に答える結果となっていた（例(7)(8)）。さらに、この NS の情報提供に対して NNS が理解の承認を明示的に提示しないために、NS が NNS の言語能力の問題を留意し、過剰参加となっている点も指摘した（例(9)）。NS が、言語ホスト（Fan 1994）と情報ホスト（薄井 2006）として役割を強く意識し、自発的もしくは相談によって情報提供を行い、話題開始の情報要求に応えようとしていたと考えられる。

後半 NNS でも、話題開始の情報要求は NNS によって行われる例が多く、自発的な情報提供や、関連した情報提供や情報要求を行うなど、様々な方法により話題が展開していた。この話題の展開の方法が多様であること、さらにこの展開において必ずしも話題開始の質問に応じて収束しているわけではない点で、前半 NNS とは異なっていた（例(10)）。前半 NNS のように

NNS に情報ホスト（薄井 2006）として情報提供を行う点、NS 同士のやりとりの中にも NNS に向けた発話が観察される点において、NNS の存在を NS は意識していることが指摘できる。しかし、言語能力の問題は前半 NNS ほど留意されない結果、NS 同士のやりとりとなり、NNS が傍参与者（大場 2006）となる様子も同時に観察された。後半 NNS では、NS 同士でも母語場面のように会話を楽しむ余裕が出てくると同時に、やはり NNS を意識した状態でもあると考えられる。

接触場面の共通点としては、「知らない者」である NNS が「知っている者」である NS に情報要求することで話題を開始している例が多かった点が指摘できる。三者会話でありながら、表面上、NS と NNS という所与の属性が顕在化していたと考えられる。NS と NNS がチームに分かれて情報交換をする現象（中井 2006）に当たると考えられる。しかし、NNS に対する情報提供は 2 人の NS で行っており、またその方法には多人数会話の特徴が観察された。つまり、表面上は NS と NNS という二者会話の情報のやりとりに見えながら、その方法においては、三者会話のやりとりのメカニズムによって展開しているといえる。2 人の NS は NNS の情報要求に対し、2 人で対応すればよく、負担が減少していると考えられる。また、もう 1 人の NS が情報提供を行ったことに対し、「うまく説明してくれた」という肯定的評価も FUI において報告され、会話に対する評価にも影響している。NNS の存在によって NS としての役割が強く意識され、NS と NNS 間の会話に参加している意識でありながら、NS は、実は母語場面の三者会話の方法を利用していると考えられる。

6. まとめと今後の課題

「知らない者」である話し手が、2 人の「知っている者」に対して情報要求を行うことにより開始された話題に焦点をあて、母語場面と接触場面（前半 NNS、後半 NNS）において、2 人の受け手がどのように応えていくのかを分析し、各場面の共通点と相違点を述べた。今回の分析では参加者の情報提供の方法に注目したが、例(9)の前半 NNS における NS のように、発話の形式上は情報要求であっても、実質的には情報提供となって会話の主導権を握っている例が観察された。発話の形式からの分析だけでなく、参加者のやりとりにおいて実質的に何が起きているのか、そこでは参加者どのようなストラテジーを使用しているのかをさらに分析する必要があるといえる。

文字化の規則

[]	同時発話
[[]]	同時発話のうち、重ねた方の発話
//	ターンを取得しない発話
/	ターンを取得しない発話が発話された位置
{笑}	笑い
{ }	笑いながらの発話
↑	上昇イントネーション
XXX	聞き取り不能部分
数字	沈黙の秒数
、	ごく短いポーズ
()	咳などの非言語行動

参考文献

- 薄井弘美 (2006) 日本語非母語話者の社会文化規範とその形成過程—インターアクション場面のケーススタディー 2005 年度千葉大学大学院修士論文
- 榎本美香 (2004) “3 人会話における聞き手のちょっとした振る舞いについて” 社会言語科学会第 14 回大会発表論文集 pp.162-165 社会言語科学会
- 榎本美香・高木南欧子・中井陽子・藤本学・坊農真弓・森本郁代・高梨克也・伝康晴 (2006) “多人数インタラクションの多様性とダイナミズム—多人数インタラクションでは何が多くなるのか?” 社会言語科学会第 18 回大会発表論文集 pp.221-230 社会言語科学会
- 大場美和子 (2006) “三者間グループ会話場面での unaddressed recipient の役割—接触場面と母語場面における会話参加プロセスの分析—” 多文化共生社会における言語管理—接触場面の言語管理研究— (村岡英裕編) vol.4 pp.37-56 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- 大場美和子 (2007) “三者間グループ会話場面における話題の開始—接触場面と母語場面における知人関係の会話の分析—” 接触場面と言語管理の学際的研究—接触場面の言語管理研究— (村岡英裕編) vol.5 pp.37-52 千葉大学大学院人文社会科学研究
- 熊谷智子・木谷直之 (2006) “三者面接調査における回答者間の相互作用—同性の友人同士の場合—” 日本語科学 20 pp.47-65 国立国語研究所
- 斎藤里美 (1989) “日本語教育における疑問文・質問文—コミュニケーション上の機能からみた日本語教材の課題” 日本語学 8 巻 8 号 pp.41-56 明治書院
- 高梨克也・伝康晴・榎本美香・森本郁代・坊農真弓・細馬宏通・串田秀也 (2004) “多人数会話における話者交替再考—参与構造とノンバーバル情報を中心に—” 社会言語科学会第 13 回大会発表論文集 pp.144-153 社会言語科学会
- 中井陽子 (2006) “会話のフロアーにおける言語的／非言語的な参加態度の示し方—初対面の母語話者／非母語話者による 4 者間の会話の分析” 早稲田大学日本語教育研究センター講座日本語教育 42 分冊 pp. 25-41 早稲田大学語学教育研究所
- ネウストプニー, J.V. (1981) “外国人の日本語の実態— (1) 外国人場面の研究と日本語教育” 日本語教育 45 号 pp.30-40 日本語教育学会
- ネウストプニー, J.V. (1994) “日本研究の方法論—データ収集の段階—” 待兼山論叢 28 日本語学篇 pp.1-24 大阪大学文学部
- ネウストプニー, J.V. (1995) 新しい日本語教育のために 大修館書店
- 初鹿野阿れ・岩田夏穂 (2007) “3 人の自由会話における参加者の情報提示” 社会言語科学会第 19 回大会発表論文集 pp.340-343 社会言語科学会
- 南不二男 (1972) “日常会話の構造—とくにその単位について” 月刊言語 1 巻 2 号 pp.108-115 大修館書店
- 南不二男 (1983) “第 2 章 質問文の構造” 朝倉日本語講座 4 文法と意味 (水谷静夫編) pp.39-74 朝倉書店
- 村岡英裕 (2003) “アクティビティと学習者の参加—接触場面にもとづく日本語教育アプローチのために—” 接触場面と日本語教育 ネウストプニーのインパクト (宮崎里司／ヘレン・マリOTT編) pp.245-259 明治書院

- Fan, S.K. (1994) "Contact situations and language management" *Multilingua* 13-3, pp. 237-252
- Goodwin, C. (1981) *Conversational Organization: Interaction Between Speakers and Hearers*. Academic Press
- Kawasaki, A. (1992) "Boomerang speech in Japanese" *ことばのモザイク: 奥田夏子名誉教授古希記念論文集* (武内道子他編) pp.173-186 目白言語学会
- Kerbrat-Orecchioni, C. (2004) "Introducing polylogues" *Journal of Pragmatics* 36 pp.1-24

¹ 南 (1972) の「談話」の6つの認定基準(ポーズ, 連続性, 参加者の一定性, communication 上の function の一定性, 言葉の調子の一定性, 話題の性格の一定性)を参考に, 主に, 内容の関連性と沈黙の有無から, 各会話における話題を抽出した.

² 情報提供は, 参加者が自発的に陳述を行った場合で, 自らの発話する機会を放棄して他の参加者に発話の義務が生じることのない場合を対象とした. 情報要求は, 斎藤(1989), 南(1983)の質問文の定義を参考に, 形式, 文脈, 音声から判断し, 1人の参加者が相手に発話の機会を与えることによって情報を要求した結果, 要求された参加者は情報を提供する義務が生じた場合を対象とした. 情報要求に対し実際に情報提供を行ったかどうかは考慮しなかった.

³ 多人数会話におけるこのような発話を, 応答とするか, 応答に対する認定とするかに関する議論には, 榎本他(2006)がある.